

野鳥小委員会

この小委員会、立山連峰の自然環境の素晴らしさに魅せられて、昭和3年出生地の別府市から富山市に移籍して、永住を決意しました。...

越中の野生鳥獣

富山大学名誉教授 植木忠夫

私は、越中の野と山と海の自然環境の素晴らしさに魅せられて、昭和3年出生地の別府市から富山市に移籍して、永住を決意しました。...

越中産鳥類 261種

野鳥の代表としてライチョウをあげたい。ライチョウの種類は亜種を含めて100種以上も数えられ、北半球のみにみられ富山のライチョウはニホンライチョウというのが正しくLagopus mutus japonicusと学名がついており三名法で学名がついています。...

ただライチョウの卵の人工ふ化に成功したことは世界初で、このことは雑誌「遺伝」に詳しく発表しました。(1960)

越中産獣類 36種

獣類の代表としては、カモシカ(ニホンカモシカ)をあげたい。

学名 Capriornis crispus と書き二名法が用いられていて japonicus といいません。ライチョウと同様国の特別天然記念物として大切に保護されています。...

ことに岩場のある森林(例えば、上市町立山川、立山タンボ沢北尾根、黒部川東沢谷、柳又谷)に多く見られ、その数は、決して少くありません。

立山浄土山や室堂周辺では生息していないが、まれに出現することがあるらしく、浄土山より室堂を経て、大日岳方面へ(1965)、浄土山より、山腹を一越方面(1974)、国見岳稜線上(1976)などの観定例があるに過ぎません。

昭和26年(1961)春から冬にかけて、日本一称名滝(滝つぼをいれて落差350m)の調査(20名)を中心とする学術調査を行った際、5月28日早朝、称名谷の中の廊下、大谷の出合あたり左岸にニホンカモシカが出現したのを16ミリのカラーフィルムにおさめ昭和37年の日本生物教育学会第17回大会(富山)で講演した際におめにかかけました。

しばしば低山帯の林道や登山路(例えば朝日町サカサマ谷、上市町馬場島、大山町有峰真川、立山町長倉)などにも姿を見せたことがあります。また県西部では、生息地は限られており、上平村の大笠山に比較的多く、利賀村坂上土地内にも記録があります。本種はテリトリーを持ち、ツガイで行動することが多く、休憩場は見晴しのきく岩場であることが多い。急な傾斜地を巧みに行動いたします。

植食性動物で灌木ノ枝葉や草本を3~5cmにちぎって食べウシの様に反すういたします。角の基部の輪状の隆起は年令と共に増加いたします。

獣類には親しみの深いものが沢さんありますが、述べたいものの1種に就いて一寸記します。それは私と満3年同せいしていたヤマネのことです。ヤマネ科ヤマネ属ヤマネ、一科一属一種、日本特産で気温の低下とともに冬眠する。リスに似ていますが、はるかに小型で、背中に黒色の正中線があり、尾は短く、頭胴の半分位の長さであります。冬眠中は、尾部で頭をかくす様にピンポン玉のような大きさで丸くなって、立山温泉の廊下どころがっているのをみつけ、持って帰り、鳥かごに入れ満3カ年飼育しました。食料はヒマワリの種子10ケと、水あるいは牛乳だけを与えました。夜行性であります。カゴから取り出すと、ぶるっと冬眠からさめて、私の体を運動場のようにして、よくなつてくれました。名前をヤッチャンとよび、ミスのみまで昇天しました。

## 創設60周年の歩み

副会長 本多啓七

当生物学会も、早や創設60周年を迎え、思えば幾多の変動を経て今日まで続いてきた。

創設50周年を迎えたさいには、当学会の初代会長である菊池勘左工門先生を佐渡からお招きして、富山県民会館で、一般公開の「佐渡のトキ」と題する特別講演をして頂き、参加の聴衆に深い感動を与えるところのトキ保護の重要性を叫ばれた。また後鰐類の研究に専念しておられた安部武雄先生をはじめ7名の会員の方々が研究発表をなさって、盛大な創立50周年記念大会であった。

52年度では1泊2日の新潟県松之山町周辺の自然研修会で風衝林やブナ林の観察が印象深い。次に哀しいことがあった。長らく本会の理事として活躍されていた安部武雄先生が他界されたことである。謹んで、生前の当学会に寄せられた労に対し、感謝状を贈呈した。

53年度では1泊2日の白山スーパー林道沿線の自然研修会で、特に天生峠湿原の観察が印象深く、研究発表においても、白木峰や東笠山の湿原に関するものがあつた。なお、小林会長は、「モスクワの国際遺伝学会会議に出席して」と題して発表して下さいました。

54年度では4月28日から2泊3日の佐渡の自然研修会を実施した。初代会長の菊池先生の大歓迎を受け、ドンデン山の宿舎で先生と共に盃を傾けてご健在を祝ったことが、今生の別れとなるとは、先生はあれから1年とたたない2月9日に永眠なさつた。われわれと最後の別れをするために佐渡に招かれたのか、佐渡にいる間はわれわれと共に行動を取られ、くまなく案内され、説明して下さいました。お姿を思い、人生の無情が感じられてならない。この時の会誌、第20号を「故菊池勘左工門先生追悼号」といたし、先生に感謝状を贈呈した。

55年度では、福井県九頭竜峡の1泊2日の自然研修会(7月12日~13日)、学術講演会では「遺伝子の組みかえとは」-飯野東大教授、「遺伝子工学の展望」-国立遺伝研究所田島先生(10月6日)、さらに「ビルマのゴマ」-小林会長(11月22日)など、感動の多い年であった。

56年度では利賀村を中心とした蘚苔類の研修、会誌が国際標準逐次刊行物となった。

57年度では利賀村での日本蘚苔類学会全国大会を後援した。

58年度では1泊2日の新潟県海谷峡谷と駒ヶ岳-焼山の研修会は特に印象深い。

59年度 当協会の二代会長として長らく、お世話して下さいました進野久五郎先生が10月19日に永眠されたので、早速、感謝状を贈呈してご冥福を祈り、第25号を追悼号とする。

60年度では1泊2日の白骨温泉、乗鞍岳の思い出多い研修会を実施する。

以上、この10年間に、創設以来お世話して下さいました方々が他界される変動期であった。今後は、世界に立つ日本の将来といった展望で、この学会の歩みを強固にしたいものである。